

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究」
分担研究報告書

民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究

研究分担者 嶋根 卓也

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部 心理社会研究室長

研究要旨：

【目的】「刑の一部執行猶予制度」が施行され、地域における薬物依存に対する回復支援が重視されている。依存症当事者が主体となった民間支援団体であるダルク（Drug Addiction Rehabilitation Center）の活動は全国に広がり、制度対象者の受け皿の一つとして期待が寄せられている。しかし、ダルク利用者の回復状況や回復プログラムの有効性を縦断的に調べた研究は限られている。そこで、平成 28 年度より全国のダルク利用者を対象とするコホート研究を立ち上げた。今年度は、6 ヶ月後および 1 年後のフォローアップ結果を報告する。

【方法】対象者は、調査協力が得られた 46 団体のダルク利用者 695 名である。調査対象者は、入所者、通所者および研修中職員（無給）であった。平成 28 年 10 月から 12 月にかけて、利用者の自記式によるベースライン調査、6 ヶ月後（FU1 と表記）、1 年後（FU2 と表記）にフォローアップ調査を実施した。フォローアップ調査は職員による聞き取り調査であり、対象者が当該施設を退所している場合は、電話等で聞き取りを行った。メインアウトカムは薬物使用である。フォローアップ期間中に一度も薬物使用がなかった者を Abstinence（完全断薬）、薬物使用が一度でもあった者を Relapse1、薬物使用が一度でもあった者および薬物使用状況が不明な者を Relapse2 と定義した。就労状況や生活保護受給状況をサブアウトカムとした。

【結果および考察】フォローアップ調査により、以下の知見が得られた。

1. FU1 における対象者の生活拠点は、同施設（67.5%）、自宅（14.4%）、他施設（5.8%）、入院中（4.2%）、逮捕・勾留・受刑中（1.2%）、死亡（0.4%）と続いた。FU2 では、同施設（56.4%）、自宅（18.1%）、他施設（10.2%）、入院中（2.9%）、逮捕・勾留・受刑中（2.4%）、死亡（1.3%）と続いた。
2. FU1 において、Abstinence は 88.3%、Relapse1 は 5.3%、Relapse2 は 10.1%であった。FU2 において、Abstinence は 76.5%、Relapse1 は 9.2%、Relapse2 は 19.6%であった。FU1、FU2 ともに、Abstinence は、20 歳代で低く、60 歳以上で高く、年代間で有意差が認められた。また、ダルク入所 1 年未満の利用者の Abstinence は、入所 1 年以上に比べて有意に低かった。一方、男女間、主たる依存対象は、群間で有意

差は認められなかった。Abstinence を妨げる要因として、若年者であること、ダルクの入所期間が短いことが示唆された。

3. FU1 において、メンバーとの関係性を「良好」とする利用者の Abstinence は 89.8% であり、「良好ではない (74.6%)」に比べて有意に高かった ($p=0.001$)。また、スタッフとの関係性を「良好」とする利用者の Abstinence は 89.3% であり、「良好ではない (75.9%)」に比べて有意に高かった ($p=0.033$)。さらに、回復のモデルとなる仲間が「一人もいない」とする利用者の Abstinence は 79.9% であり、「複数いる (89.8%)」や、「一人だけいる (93.5%)」に比べて有意に低かった ($p=0.002$)。プログラム参加への積極性は、群間に有意差は認められなかった。これらは FU2 でも同様の傾向が認められた。利用者や職員との関係性が良好であること、回復のモデルとなる仲間がいることは、Abstinence を維持するためにプラスに働く可能性が示唆された。
4. 対象者の就労状況は、「就労していない対象者」はベースライン (76.5%)、FU1 (66.0%)、FU2 (56.5%) と減少していた。一方、「一般就労・常勤」は、ベースライン (3.3%)、FU1 (5.2%)、FU2 (7.5%) と増加していた。生活保護受給率は、ベースライン (78.3%)、FU1 (74.4%)、FU2 (67.9%) と減少していた。ダルクの利用経過とともに、就業率の上昇や生活保護受給率の低下がみられ、社会的・福祉的な回復が進んでいることが示唆された。

【結論】 全国の民間支援団体ダルクを対象としたコホート研究により、利用者の回復状況を把握することができた。6ヶ月後では利用者の 88%が、1年後では利用者の 77%が薬物を一度も使わない「完全断薬」を継続しており、当事者が主体となったダルクの活動は、薬物の再使用抑止に大いに貢献していることが示唆された。また、この「完全断薬」を維持していくためには、「利用者や職員との良好な関係性」が必要であるとともに、「回復のモデルとなる仲間」との出会いが必要であることが示された。一方、就業率の上昇とともに、生活保護受給率も低下していることから、ダルクの活動は、薬物再使用の抑止効果のみならず、社会的・福祉的な回復にも貢献していることが示唆された。

研究協力者

近藤あゆみ 国立精神・神経医療研究センター薬物依存研究部
米澤雅子 国立精神・神経医療研究センター薬物依存研究部
近藤恒夫 日本ダルク・NPO 法人アパリ

A. 研究目的

平成 28 年 6 月より、「刑の一部執行猶予制度」が施行され、地域における薬物依存に対する回復支援が重視されている。依存症当事者が主体となった民間支援団体であるダルク (Drug Addiction Rehabilitation Center) の活動は全国に広がり、制度対象者の受け皿の一つとして期

待が寄せられている。しかし、ダルク利用者の回復状況や回復プログラムの有効性を縦断的に調べた研究は限られている。ダルク利用者の予後に関する十分な知見が得られていないこと自体が、薬物依存症地域支援における課題と言えるかもしれない。

そこで、分担研究者らは、全国のダルク利用者を対象とするコホート研究を立ち上げた。研究開始にあたり、全国の各団体を個別に訪問し、本研究についての趣旨説明を行った。また、担当職員との「ダルク意見交換会」を定期的で開催し、「顔がみえる関係性」を築いた。昨年度は、平成28年10月から12月に実施されたベースライン調査の結果をもとに、ダルク利用者の基本属性や依存症背景について報告した。今年度は、6ヶ月後および1年後に実施したフォローアップ結果を報告する。

B. 研究方法

対象者は、調査協力が得られた全国46団体のダルク利用者695名である。調査依頼時、ダルクは全国で57団体が活動していた。このうち5団体は研究への同意が得られず、4団体は同意が得られたものの、調査対象となる利用者が存在しない状況であった。結果として、全国46団体から研究協力が得られ、協力率は80.7%であった。調査対象者は、入所者、通所者および研修中職員（無給）であった。有給職員、未成年者、日本語の読み書きができない利用者（外国人など）は対象から除外した。

平成28年10月から12月にかけて、利用者の自記式によるベースライン調査を実施した。ベースライン調査の対象は701名であった。ここから、白紙回答者（5名）、性別を「その他（インターセックス）」と回答した者（1名）を除外した（個人特定を避けるため）。残った695名をフォローアップ対象者とした。

ベースライン実施から、6ヶ月後の平成29年4月～6月（以下、FU1と表記）、および1年後の平成29年10月～12月（以下、FU2と表記）にフォローアップ調査を実施した。フォローアップ調査はダルク職員による聞き取り調査であり、対象者が当該施設を退所している場合は、本人、家族、関係者などに電話等で聞き取りを行った。

メインアウトカムは薬物・アルコール使用であった。フォローアップ期間中に一度も薬物使用がなかった者を **Abstinence**（完全断薬）、薬物使用が一度でもあった者を **Relapse1**、薬物使用が一度でもあった者および薬物使用状況が不明な者を **Relapse2** と定義した。なお、**Relapse2** は、不明情報をすべて「再使用あり」と捉えた“**Worst Case Scenario**” analysis である。また、就労状況や生活保護受給状況をサブアウトカムとした。

利用者の基本属性として、年代（20歳代/30歳代/40歳代/50歳代/60歳以上）、性別（男性/女性）、主たる依存対象（薬物/アルコール/その他）、入所期間（1年未満/1年以上）について、**Abstinence** の違いを比較検討した。また、利用者のプログラム関連項目として、プログラム参加への積極性（大変前向き～全く前向きではな

いまでの4件法)、メンバーとの関係性(大変良好～大変良くないまで、4件法)、スタッフとの関係性(大変良好～大変良くないまで、4件法)、回復のモデルとなる仲間(複数いる/一人だけいる/一人もいない)について、Abstinenceの違いを比較検討した。なお、プログラム参加への積極性、メンバーとの関係性、スタッフとの関係性については、バイナリ(2値情報)に変換してから分析を行った。

以上、研究実施にあたり、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得た(承認番号A2016-022)。

C. 研究結果

695名を対象とするフォローアップ調査により、以下の知見を得た。

1. FU1における対象者の生活拠点は、同施設(67.5%)、自宅(14.4%)、他施設(5.8%)、入院中(4.2%)、逮捕・勾留・受刑中(1.2%)、死亡(0.4%)と続いた。FU2では、同施設(56.4%)、自宅(18.1%)、他施設(10.2%)、入院中(2.9%)、逮捕・勾留・受刑中(2.4%)、死亡(1.3%)と続いた(表1)。
2. FU1において、Abstinenceは88.3%、Relapse1は5.3%、Relapse2は10.1%であった。Abstinenceは、20歳代(75.0%)で低く、60歳以上(93.4%)で高く、年代間で有意差が認められた($p=0.001$)。また、ダルク入所1年未満の利用者のAbstinenceは81.0%であり、入所1年以上(91.9%)に比べて有意に低かった($p<0.001$)。一方、男女間、主たる依存対象は、群間で有意差は認められなかった(表2、図1)。
3. FU2において、Abstinenceは76.5%、Relapse1は9.2%、Relapse2は19.6%であった。Abstinenceは、20歳代(57.4%)で低く、60歳以上(82.0%)で高く、年代間で有意差が認められた($p<0.001$)。また、ダルク入所1年未満の利用者のAbstinenceは65.9%であり、入所1年以上(81.7%)に比べて有意に低かった($p<0.001$)。一方、男女間、主たる依存対象は、群間で有意差は認められなかった(表3、図2)。
4. FU1において、メンバーとの関係性を「良好」とする利用者のAbstinenceは89.8%であり、「良好ではない(74.6%)」に比べて有意に高かった($p=0.001$)。また、スタッフとの関係性を「良好」とする利用者のAbstinenceは89.3%であり、「良好ではない(75.9%)」に比べて有意に高かった($p=0.033$)。さらに、回復のモデルとなる仲間が「一人もいない」とする利用者のAbstinenceは79.9%であり、「複数いる(89.8%)」や、「一人だけいる(93.5%)」に比べて有意に低かった($p=0.002$)。プログラム参加への積極性は、群間に有意差は認められなかった(表4、図3)。
5. FU2において、メンバーとの関係性を「良好」とする利用者のAbstinenceは78.1%であり、「良好ではない(60.3%)」に比べて有意に高かった($p=0.032$)。また、スタッフとの関係性を「良好」とする利用者のAbstinenceは77.4%であり、「良好ではない(66.7%)」に

比べて有意に低かった($p=0.007$)。さらに、回復のモデルとなる仲間が「一人もいない」とする利用者の **Abstinence** は 62.6%であり、「複数いる (79.6%)」や、「一人だけいる (83.3%)」に比べて有意に低かった ($p<0.001$)。プログラム参加への積極性は、群間に有意差は認められなかった (表 5、図 4)。

6. 「就労していない対象者」はベースライン (76.5%)、FU1 (66.0%)、FU2 (56.5%) と減少していた。一方、「一般就労・常勤」は、ベースライン (3.3%)、FU1(5.2%)、FU2(7.5%)と増加していた。生活保護受給率は、ベースライン (78.3%)、FU1 (74.4%)、FU2 (67.9%) と減少していた (表 1)。

D. 考察

今年度は、ダルクの利用者を対象としたコホート研究の 6 ヶ月後および 1 年後のフォローアップ結果を報告した。6 ヶ月後では利用者の 88%が、1 年後では利用者の 77%が薬物を一度も使わない「完全断薬」を継続しており、当事者が主体となったダルクの活動は、薬物依存症からの回復に大いに貢献していることが示された。

この「完全断薬」を妨げる要因として、20 歳代という若年層であること、ダルクの入所期間が 1 年未満と短いことが示唆された。入所期間が短い者や若年利用者は、自身の回復に向き合うことが、質的にも量的にも未だ十分ではなく、薬物依存症としての病識を持ちにくい状況にある

のかもしれない。その結果として、他の利用者に比べ再使用のリスクが高くなっている可能性が考えられる。こうした利用者に対しては、スタッフによるケアはもちろんのこと、入所期間が長い利用者が寄り添い、様子を伺うといった配慮が必要であろう。

一方、「完全断薬」を維持する要因として、利用者がダルクのスタッフや他の利用者と良好な関係性でいることや、「回復のモデル」となる仲間がいることが示された。これらの結果は、これまで当事者活動の中で経験的に語られてきた「通説」であり、今回その通説を科学的に証明する形となったと言えよう。逆に言えば、スタッフや他の利用者との関係性が良好ではない場合や、「回復のモデル」が上手く見つけられない場合は、再使用のリスクが高くなる可能性がある。薬物の再使用を予防し、断薬を継続するためには、日頃からスタッフ・利用者の信頼関係性の構築や、相互理解が不可欠と言える。

また、ダルクの利用経過とともに、就業率の上昇や生活保護受給率の低下がみられたことから、社会的・福祉的な回復も進んでいることが示唆された。ダルクの活動は、薬物再使用の抑止効果のみならず、社会的・福祉的な回復にも貢献していることが示された。

E. 結論

全国の民間支援団体ダルクを対象としたコホート研究により、利用者の回復状況を把握することができた。6 ヶ月後では

利用者の88%が、1年後では利用者の77%が薬物を一度も使わない「完全断薬」を継続しており、当事者が主体となったダルクの活動は、薬物の再使用抑止に大いに貢献していることが示唆された。また、この「完全断薬」を維持していくためには、「利用者や職員との良好な関係性」が必要であるとともに、「回復のモデルとなる仲間」との出会いが必要であることが示された。

一方、就労率の上昇とともに、生活保護受給率も低下していることから、ダルクの活動は、薬物再使用の抑止効果のみならず、社会的・福祉的な回復にも貢献していることが示唆された。

F. 健康危険情報

(省略)

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 嶋根卓也, 今村顕史, 池田和子, 山本政弘, 辻麻理子, 長与由紀子, 松本俊彦: 薬物使用経験のある HIV 陽性者において危険ドラッグ使用が服薬アドヒアランスに与える影響、日本エイズ学会雑誌 20(1), 2018. (in press)
- 2) 嶋根卓也: 知っておいてほしい民間支援団体の可能性と課題. 精神科治療学 32(11): 1433-1438, 2017.
- 3) 嶋根卓也: 性的マイノリティ・HIV 感染者の理解と支援. 精神療法

43(2): 270-278, 2017.

- 4) 松本俊彦, 船田正彦, 嶋根卓也, 近藤あゆみ: 薬物関連問題とどう対峙するか 疫学研究、毒性評価、臨床実践、政策提言. 精神保健研究 63: 53-61, 2017.
- 5) 嶋根卓也: 危険ドラッグの流行と終息. 最新保健情報資料 2017, 大修館書店, 東京, pp8-10, 2017.
- 6) 嶋根卓也: 自殺ハイリスク者支援 (アルコール/薬物乱用・依存症). ワンストップ支援における留意点—複雑・困難な拝啓を有する人々を支援するための手引き—平成 28 年度自殺防止対策事業「ワンストップ支援のための情報プラットフォームづくり」, 一般社団法人日本うつ病センター, 東京, pp28-31, 2017.
- 7) 嶋根卓也: 青少年における薬物乱用の最新動向～薬剤師は『ダメ、ゼッタイ』で終わらせない関わりを～. Excellent Pharmacy 5 月 1 日号, メディファーム株式会社, 東京, pp7-8, 2017.

2. 学会発表

- 1) Shimane T: Monitoring survey of drug use and addiction, and recovery support program in Japan, 17th Drug addiction recovery support, Thanyarak Khon Kaen Hospital(Thailand), 2017.3.22-23.
- 2) Shimane T: Epidemic and decline of new psychoactive substances in Japan: Data from nationwide survey on drug use, 2017 Expert meeting, Prevalence and patterns of drug use among the general

population(GPS), EMCDDA, Lisbon (Portugal), 2017.6.6-7.

- 3) 嶋根卓也, 大曲めぐみ, 北垣邦彦, 立森久照, 船田正彦, 和田清: わが国の薬物乱用・依存状況の最新動向: 危険ドラッグ問題の流行と終息. 日本法中毒学会第36年会 特別講演, 東京, 2017.7.7.
- 4) 嶋根卓也, 大曲めぐみ, 近藤あゆみ, 米澤雅子, 近藤恒夫: 民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究: ベースライン調査より. シンポジウム 8 刑の一部執行猶予制度施行以降の薬物依存症地域支援の課題. 第39回日本アルコール問題関連学会, 神奈川, 2017.9.9.
- 5) 和田清, 合川勇三, 森田展彰, 嶋根卓也: 薬物乱用・依存症者における HIV・HCV 等感染状況と感染ハイリスク行動に関する研究. 平成29年度日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 神奈川, 2017.9.9.

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 引用文献

なし

表1. フォローアップ対象者の生活状況

	ベースライン n (%)	FU1(n=695) n (%)	FU2(n=695) n (%)
本人へのアクセス			
あり		632 (90.9)	590 (84.9)
なし		63 (9.1)	105 (15.1)
施設利用状況			
入所中		491 (70.6)	411 (59.1)
通所中		68 (9.8)	62 (8.9)
退所		136 (19.6)	222 (31.9)
生活拠点・所在			
同施設で生活		469 (67.5)	392 (56.4)
自宅で生活		100 (14.4)	126 (18.1)
他施設で生活		40 (5.8)	71 (10.2)
入院中		29 (4.2)	20 (2.9)
逮捕・勾留・受刑中		8 (1.2)	17 (2.4)
死亡		3 (0.4)	9 (1.3)
その他		12 (1.7)	8 (1.2)
不明		34 (4.9)	52 (7.5)
就労状況			
就労していない	532 (76.5)	459 (66.0)	393 (56.5)
就労中 (福祉的就労・非常勤)	21 (3.0)	16 (2.3)	22 (3.2)
就労中 (福祉的就労・常勤)	14 (2.0)	13 (1.9)	7 (1.0)
就労中 (一般就労・非常勤)	34 (4.9)	39 (5.6)	36 (5.2)
就労中 (一般就労・常勤)	23 (3.3)	36 (5.2)	52 (7.5)
就労中 (ダルク・ボランティア)	61 (8.8)	55 (7.9)	61 (8.8)
就労中 (ダルク・非常勤)	0 (0.0)	6 (0.9)	9 (1.3)
就労中 (ダルク・常勤)	0 (0.0)	10 (1.4)	17 (2.4)
その他 (復学、通学など)	9 (1.3)	10 (1.4)	6 (0.9)
不明	1 (0.1)	40 (5.8)	66 (9.5)
生活保護			
受給中	544 (78.3)	517 (74.4)	472 (67.9)
受けていない (現在、申請中)	23 (3.3)	3 (0.4)	3 (0.4)
受けていない (過去に受けていた)	19 (2.7)	34 (4.9)	56 (8.1)
一度も受けたことがない	109 (15.7)	95 (13.7)	86 (12.4)
不明	0 (0.0)	35 (5.0)	52 (7.5)
自助グループ参加頻度			
ほぼ毎日		462 (66.5)	370 (53.2)
週に数回		89 (12.8)	117 (16.8)
週に1回くらい		31 (4.5)	26 (3.7)
月に1回くらい		20 (2.9)	15 (2.2)
ほとんどなし		51 (7.3)	64 (9.2)
不明		31 (4.5)	77 (11.1)

FU1:ベースラインから6ヶ月後,FU2:ベースラインから1年後

表2. ベースライン調査から6ヶ月後のフォローアップ結果（薬物・アルコール使用）

		Abstinence		Relapse1		Relapse2	
		DR	AL	DR	AL	DR	AL
合計		88.3%	80.7%	5.3%	12.5%	10.1%	17.7%
性別	男性	88.4%	80.8%	5.1%	12.2%	9.9%	17.5%
	女性	87.5%	79.2%	8.3%	16.7%	12.5%	20.8%
	p-value	0.571	0.572	0.426	0.457	0.571	0.572
年代	20歳代	75.0%	67.6%	14.7%	19.1%	25.0%	32.4%
	30歳代	91.2%	84.9%	5.9%	11.7%	8.3%	14.6%
	40歳代	88.5%	84.1%	4.8%	10.1%	9.3%	13.7%
	50歳代	88.7%	77.4%	1.5%	13.5%	9.0%	20.3%
	60歳以上	93.4%	77.0%	1.6%	14.8%	3.3%	19.7%
	p-value	0.001	0.013	0.004	0.339	0.001	0.013
主たる依存	薬物依存	87.4%	83.1%	5.9%	9.8%	11.2%	15.5%
	アルコール依存	88.8%	70.6%	4.7%	22.4%	8.8%	27.1%
	その他	100.0%	97.1%	0.0%	2.9%	0.0%	2.9%
	p-value	0.189	0.001	0.451	<0.001	0.189	0.001
入所期間	入所1年未満	81.0%	69.9%	8.4%	18.6%	16.8%	27.9%
	入所1年以上	91.9%	85.9%	3.8%	9.6%	6.8%	12.8%
	p-value	<0.001	<0.001	0.026	0.002	<0.001	<0.001

DR:薬物使用（過去6ヶ月間）、AL：アルコール使用（過去6ヶ月間）

Abstinence：フォローアップ期間中に一度も薬物/アルコール使用がなかった者

Relapse1：フォローアップ期間に薬物/アルコール使用が一度でもあった者

Relapse2：フォローアップ期間に薬物/アルコール使用が一度でもあった者あるいは薬物/アルコール使用が不明であった者

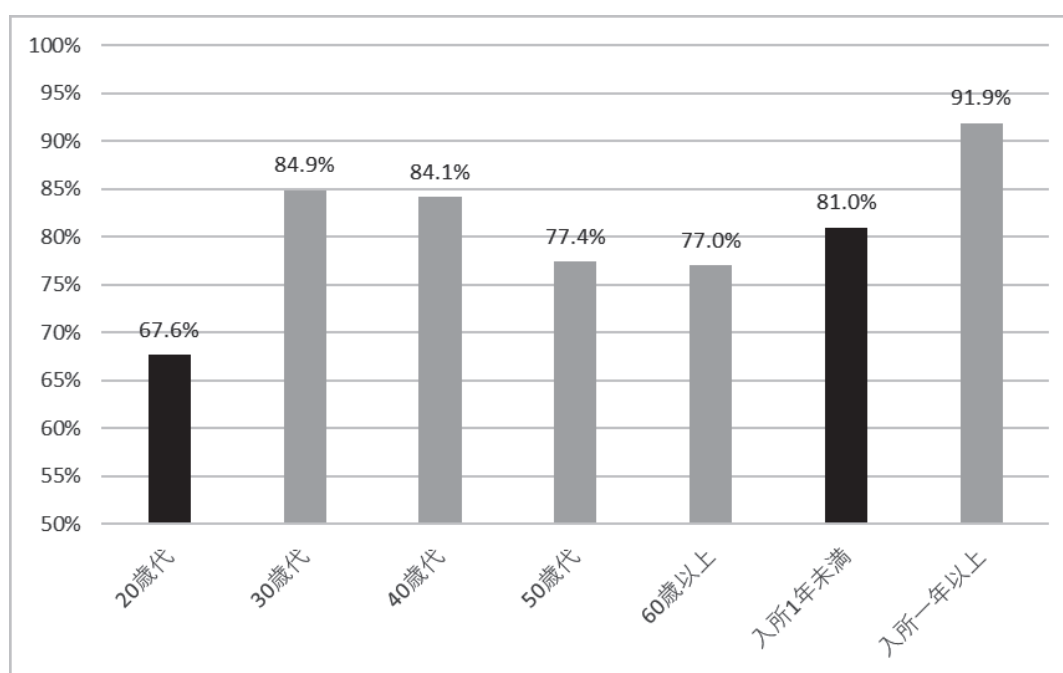


図 1.FU1 における Abstinence（年代別、入所期間別）

表3. ベースライン調査から1年後のフォローアップ結果（薬物・アルコール使用）

		Abstinence		Relapse-type1		Relapse-type2	
		DR	AL	DR	AL	DR	AL
合計		76.5%	67.6%	9.2%	17.6%	19.6%	28.5%
性別	男性	77.0%	67.7%	9.0%	17.6%	19.0%	28.3%
	女性	70.8%	66.7%	12.5%	16.7%	27.1%	31.3%
	p-value	0.343	0.750	0.591	0.778	0.343	0.750
年代	20歳代	57.4%	48.5%	20.6%	27.9%	41.2%	50.0%
	30歳代	78.5%	71.7%	10.7%	17.1%	19.5%	26.3%
	40歳代	76.7%	73.1%	10.6%	13.2%	18.9%	22.5%
	50歳代	81.2%	64.7%	1.5%	18.8%	12.0%	28.6%
	60歳以上	82.0%	62.3%	1.6%	21.3%	13.1%	32.8%
	p-value	<0.001	0.001	<0.001	0.060	<0.001	0.001
主たる依存	薬物依存	76.8%	71.7%	10.8%	15.1%	20.0%	25.1%
	アルコール依存	77.6%	57.1%	6.5%	27.1%	16.5%	37.1%
	その他	67.6%	61.8%	0.0%	5.9%	29.4%	35.3%
	p-value	0.262	0.009	0.071	0.001	0.262	0.009
入所期間	入所1年未満	65.9%	51.3%	12.4%	24.3%	27.4%	42.0%
	入所1年以上	81.7%	75.5%	7.7%	14.3%	15.8%	22.0%
	p-value	<0.001	<0.001	0.003	<0.001	<0.001	<0.001

DR:薬物使用（過去6ヶ月間）、AL：アルコール使用（過去6ヶ月間）

Abstinence：フォローアップ期間中に一度も薬物/アルコール使用がなかった者

Relapse1：フォローアップ期間に薬物/アルコール使用が一度でもあった者

Relapse2：フォローアップ期間に薬物/アルコール使用が一度でもあった者あるいは薬物/アルコール使用が不明であった者

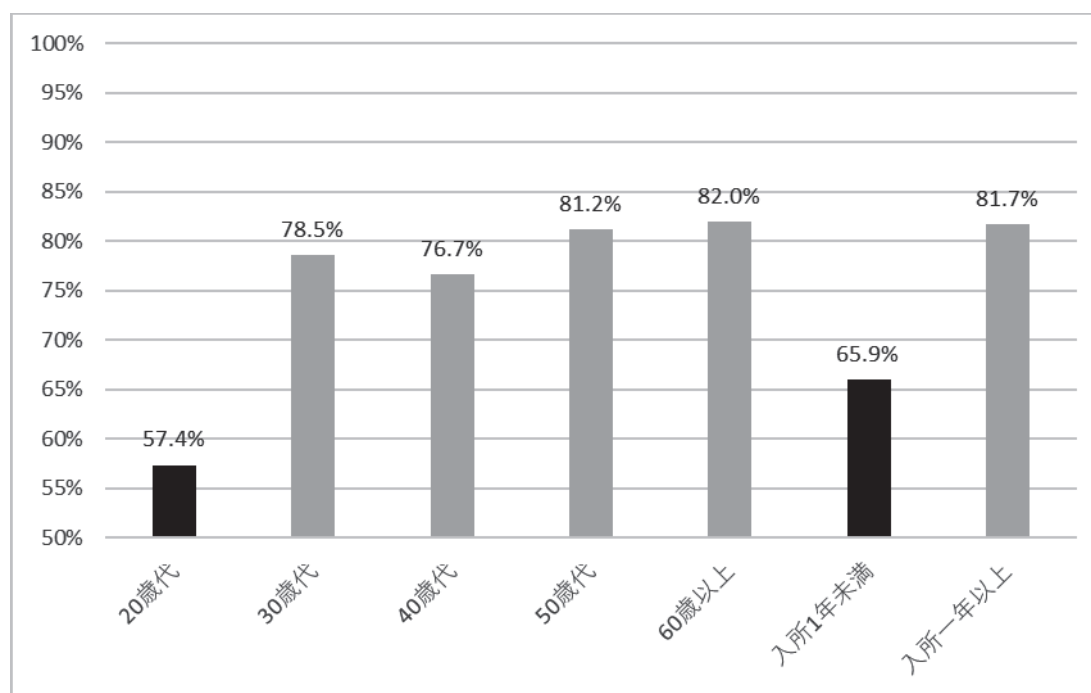


図 2.FU2 における Abstinence（年代別、入所期間別）

表4. ベースライン調査から6ヶ月後のフォローアップ結果（プログラム関連）

		Abstinence		Relapse1		Relapse2	
		DR	AL	DR	AL	DR	AL
プログラム参加への積極性	前向き	88.7%	81.3%	5.0%	12.0%	9.6%	17.0%
	前向きではない	86.0%	76.6%	7.5%	15.9%	13.1%	22.4%
	p-value	0.681	0.472	0.757	0.641	0.681	0.472
メンバーとの関係性	良好	89.8%	82.2%	4.2%	11.2%	8.5%	16.0%
	良好ではない	74.6%	65.1%	15.9%	25.4%	25.4%	34.9%
	p-value	0.001	0.005	0.001	0.022	0.001	0.005
スタッフとの関係性	良好	89.3%	81.7%	4.7%	11.8%	9.2%	16.7%
	良好ではない	75.9%	68.5%	13.0%	20.4%	22.2%	29.6%
	p-value	0.033	0.195	0.119	0.480	0.033	0.195
回復のモデルとなる仲間	複数いる	89.8%	83.8%	4.8%	10.2%	9.5%	15.4%
	一人だけいる	93.5%	85.2%	3.7%	12.0%	5.6%	13.9%
	一人もいない	79.9%	69.1%	7.9%	18.7%	15.1%	25.9%
	p-value	0.002	<0.001	0.011	0.001	0.002	<0.001

DR:薬物使用（過去6ヶ月間）、AL：アルコール使用（過去6ヶ月間）

Abstinence：フォローアップ期間中に一度も薬物/アルコール使用がなかった者

Relapse1：フォローアップ期間に薬物/アルコール使用が一度でもあった者

Relapse2：フォローアップ期間に薬物/アルコール使用が一度でもあった者あるいは薬物/アルコール使用が不明であった者

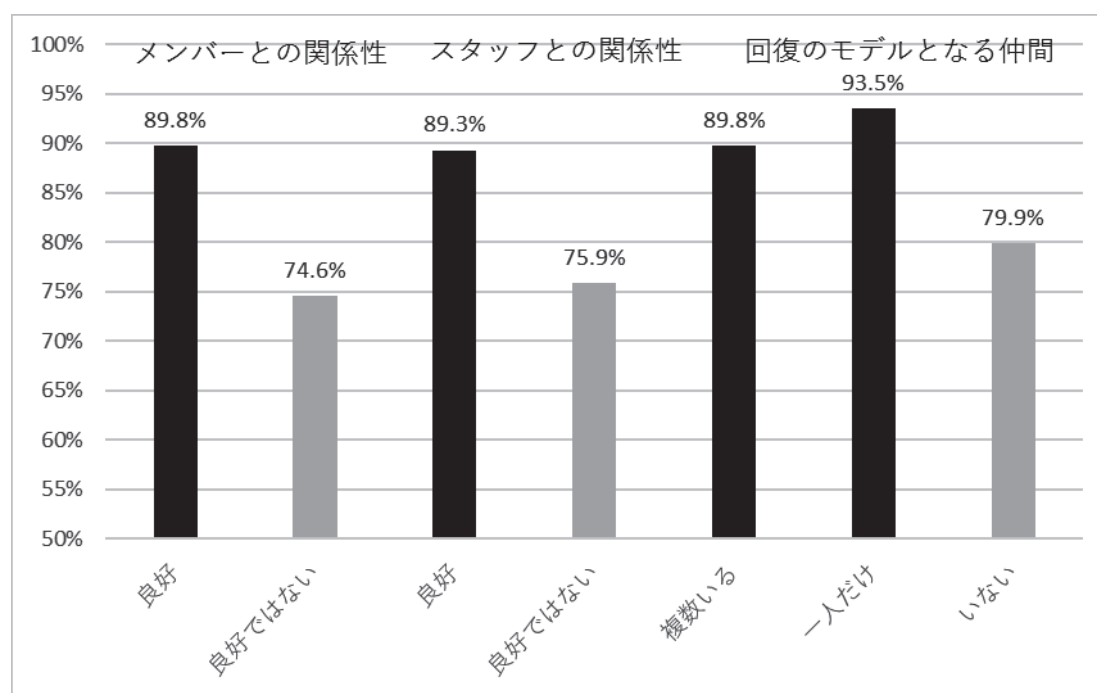


図 3.FU1 における Abstinence（プログラム関連）

表5. ベースライン調査から1年後のフォローアップ結果（プログラム関連）

		Abstinence		Relapse1		Relapse2	
		DR	AL	DR	AL	DR	AL
プログラム参加への積極性	前向き	76.6%	68.2%	9.1%	17.0%	19.1%	27.5%
	前向きではない	75.7%	63.6%	10.3%	21.5%	22.4%	34.6%
	p-value	0.699	0.405	0.657	0.392	0.699	0.405
メンバーとの関係性	良好	78.1%	69.1%	8.3%	16.5%	18.2%	27.2%
	良好ではない	60.3%	52.4%	17.5%	27.0%	33.3%	41.3%
	p-value	0.032	0.104	0.106	0.151	0.032	0.104
スタッフとの関係性	良好	77.4%	68.7%	9.0%	17.1%	19.1%	27.8%
	良好ではない	66.7%	57.4%	13.0%	22.2%	27.8%	37.0%
	p-value	0.007	0.013	0.019	0.017	0.007	0.013
回復のモデルとなる仲間	複数いる	79.6%	73.4%	8.8%	13.3%	17.6%	23.8%
	一人だけいる	83.3%	73.1%	5.6%	19.4%	14.8%	25.0%
	一人もいない	62.6%	49.6%	12.9%	25.9%	28.1%	41.0%
	p-value	<0.001	<0.001	0.003	<0.001	<0.001	<0.001

DR:薬物使用（過去6ヶ月間）、AL：アルコール使用（過去6ヶ月間）

Abstinence：フォローアップ期間中に一度も薬物/アルコール使用がなかった者

Relapse1：フォローアップ期間に薬物/アルコール使用が一度でもあった者

Relapse2：フォローアップ期間に薬物/アルコール使用が一度でもあった者あるいは薬物/アルコール使用が不明であった者

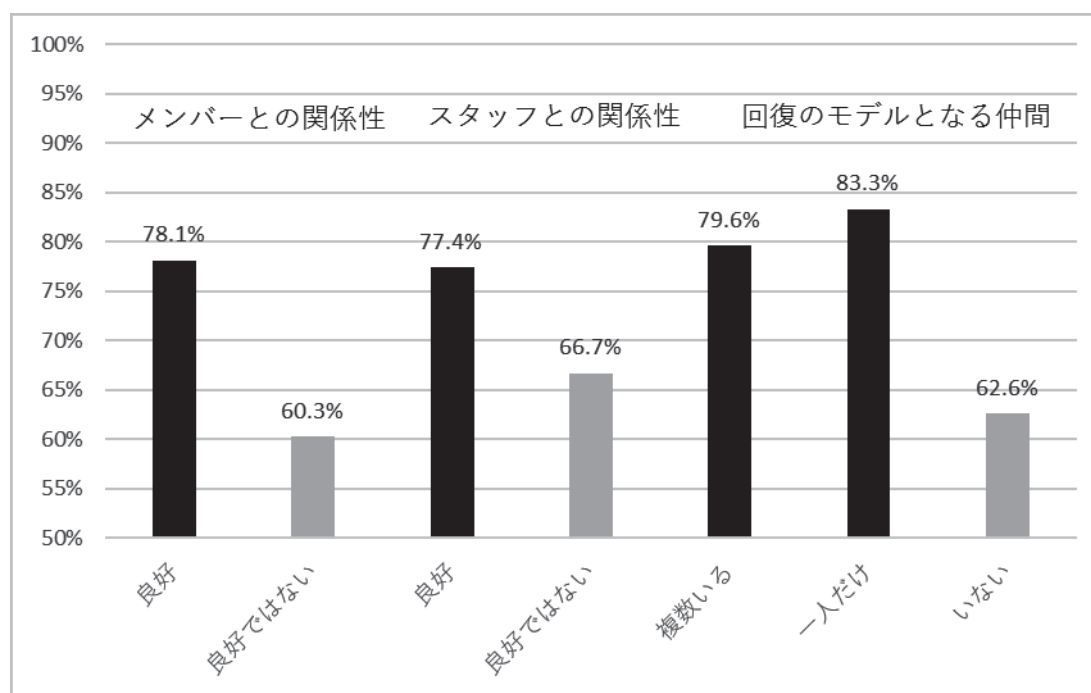


図 4.FU2 における Abstinence（プログラム関連）